

# 食

## 「コースの水面下

(18)

ジャーナリスト  
梅崎 義人

09.06.08

通信文化  
新聞

わが国の漁業生産量の減少に歯止めがかからない。

農水省がこのほど発表した08年の漁業生産量は前年比1・7%減の559万トン。ピークの1984年の約1300万トンに比べ42%にまで落ち込んだ。

国内生産量の減少分をカバーしたのは輸入魚だ。日本の商社が世界の隅々から安い水産物を集め国内市場に供給した。

安価な輸入魚に押されて日本の沿岸漁業は衰退の道を歩む。昨年の漁業就業人口は20万人を割った。1948年の80万人の4分の1である。高齢や廃業で毎年約1万人の漁業者が減少している。現状のままだと20年後には漁業者がこの国から消える計算が

成り立つ。

沿岸漁業の衰退は輸入魚の増加だけではない。根本的な背景は漁場整備を怠ったことである。

豊かな漁場の基礎となるのが豊かな里海だ。河川から窒素、リン、珪素、鉄などの元素や栄養分が里海に注がれ、貝類を含む渚の生物が持続的に生息し、大型のコンブから小型のモズクに至る多種類の海藻が繁殖する。こんな海の楽園には魚が産卵し、稚魚が揺り籠を求めて群生し、海藻をエサとするウニ、アワビが育つ。

健全な里海は海全体の生産力を高める素となる。陸地からの有害物を浄化し、海の植物類と太陽エネルギーによる光合成が活発に行

# 「海の森づくり」の革新技術に動かない官僚

## 日本の漁業は存亡の境地にある

われ、植物プランクトン↓動物プランクトン↓小型魚↓中型魚↓大型魚という海の食物連鎖が形成される。

わが国の沿岸から海のエネルギー源となる健全な里海が消失した結果、磯焼けが全国に拡大しつつある。当然のごとく漁業資源も減少した。この現実には歯止めをかけ、豊かな漁場を取り戻すには国が動くべきなのだ、その音さえ聞かされてこない。

5月29、30の両日、東京海洋大学で開催された「海の森づくり」シンポジウムを取材した。主催者の特定非営利活動法人「海の森づくり推進協会」の松田恵明代表理事によると、沿岸漁業再生のための海の森づくり運動は1994年から始まっている。展開している事業は、コンブ海中林の造成と施肥による海藻の育成。

前者は海中に固定した太いロープにコンブの胞子を

埋め込んだ種糸を巻き付ける。ロープに張り付いた根から大きな枝葉が垂れ下がり、4〜5か月で4メートルのコンブに成長する。後者は腐食酸鉄を鉄鋼スラックと腐植土に混ぜ、ヤシ袋に詰めて汀線部に埋設するか、鋼製ボックスに入れて浅海部に沈設する。

これは新日鉄が開発した技術だ。鹿児島、長崎、愛媛、富山の漁協と共同で実施し、いずれも見事なコンブ林と海藻林を誕生させている。

しかし、松田代表によると、水産庁がこの革新的なプロジェクトに乗ってこないという。養殖とか藻場造成という支援事業の内容に当てはまらないというのがその理由だ。日本の漁業が存続の境地に立たされているいま、官僚の常識を覆すには、政治問題化し来る総選挙の争点の一つにすべきだ。